宮崎大学医学部整形外科

同門会誌

第 26 号

平成２７年７月

宮崎大学医学部整形外科学教室同門会

平成26年度宮崎大学医学部整形外科学教室新入教室員歓迎会
宮崎大学医学部整形外科学教室開講40周年記念祝賀会　帖佐悦男教授就任10周年記念祝賀会
平成26年4月19日　於 宮崎観光ホテル

田島直也先生　喜 寿 祝 賀 会

平成26年9月23日　於 宮崎観光ホテル

御　挨　拶

河野雅行

皆様方におかれましては、お元気で御活躍中と思います。

昨年はエボラ出血熱、デング熱、インフルエンザの流行、御嶽山の噴火による惨事、引いては宮崎県でもえびの高原の入山規制や鳥インフルエンザ騒動等々、更には衆議院選挙、知事選挙と大変目まぐるしい一年でした。今年も、日本人も巻き込まれる世界的なテロが多発しており、統一地方選挙も行われます。忙しい日々になりそうです。毎度申しておりますが、我々も社会の変化を見据えつつ、それに協力しながらも振り回されない様に自分の職責を全うしたいものです。

昨年は、地域医療の再生を目的として診療報酬の改定が行われました。残念ながら第一線で地域医療を支えている中小病院や診療所についての配慮は未だ不充分な内容です。何度も申します様に地域医療崩壊の原因は多々有りますが、最大要因は医療・福祉予算の減額である事は明白です。医療費の内、整形外科の占める割合は僅か3%に過ぎません。これは外来、入院、検査、手術等を全部包括した数字です。それでも、「整形外科はまだまだ儲かり過ぎ」との、根強い意見も依然として有ります。更に、経済至上主義者である政財界には医療・福祉をも、儲けの一貫としての考えも有ります。混合診療解禁、薬局に拠る検査、医療類似行為の拡大、TPP参加問題等が次第に我々を締め付けて来ております。更に、昨年、「医療介護総合確保推進法」と言う重要な法案が成立しました。今後の我が国の医療改革の原点ともなる重要な内容を多岐に渡り含んでいます。人口減少と高齢者人口の増加に伴う医療・介護費用増加への対策法です。今後は否応なく医療と介護の連携が増々強くなり、医療は限りなく希釈されて来るものと思われます。医療現場を無視した様な政策が次々に行われようとしています。我々は医療政策を慎重に見守り対応を誤ってはなりません。我々が最も注意すべきは、様々な事柄に無関心を装うことです。此の度、宮崎大学の陣容も、学長以下一新される様です。同様に我々も含めて全ての立場で変革が要求されている時代でもあります。

一方、我が同門会活動、並びに核となります大学教室活動は、特に大きな問題は無く順調に推移しております。教室に於かれましては田島名誉教授以来のテーマでもある、スポーツ・メディカルに関する研究・業績は、帖佐教授を中心に堅実に実績を挙げられ、全

国的にも高い評価を受けられており、昨年の国体に於ける宮崎県の躍進の一翼を担っているものと思われます。また、帖佐教授は今やロコモティブ・シンドロームの旗手としても全国的に御活躍中です。更に、本年度は教室主催で幾つかの学会が開催されます。教室の更なる飛躍を期待しております。

今回の同門会奨励賞は慎重な審査の結果、山口奈美先生が受賞されました。おめでとうございます。更なる精進を期待いたします。

昨年度の新規入会は４名ありました。齊藤由希子先生、今里浩之先生、平川雄介先生、横江琢示先生の方々です。御入会を歓迎し、御活躍を期待いたしますと共に同門会への積極的な御協力も御願いいたします。今年も多数の御入会を期待しております。同門会の先生方に於かれましては、知人、子弟等の御入会を斡旋していただきたくお願い申し上げます。

皆様方の御健勝を祈念いたします。

新入教室員歓迎

帖佐悦男

2014年、日本では豪雪・集中豪雨・台風や御嶽山の噴火など自然災害が多発した1年となりました。また、宮崎では実感できないのが現状ですが、アベノミクスの継続や地方創生など期待される話題もありました。

教室にとりましては、昨年は同門会長の河野雅行先生が県の医師会長に就任され、私たち同門・教室員にとって大変嬉しい知らせでした。これまで以上のご活躍を祈念致します。一方、多くの同門の方々が病気療養中ですので、早期の快復をお祈りするばかりです。教室も40周年を過ぎ日本と同じように高齢化に向かっておりますので、先生方も健康には十分ご留意下さい。

さて、今年の春は寒の戻りなどがあり体調を崩された方も多かったようですが、私は昨年に引き続き花見に出かけ楽しいひと時を過ごすことができました。新入教室員を迎えるこの時期は、このような時間が何度あっても大変嬉しいものです。

また大学では、附属病院の改修に引き続き研究棟の改修工事も終了しました。以前と同じ場所ですので近くまでお越しの際は是非お立ち寄りください。

今年度は、宮崎大学が国立大学法人として初めての田野病院の指定管理者となったり新学長の誕生など大きな変革を迎えますが、整形外科の役割はこれまで通り地域に根差し教育・臨床・研究を進めていきたいと思います。教育に関しましては、専門医制度もほぼかたまりましたので、人間味のある医師を養成する卒前教育と卒後教育で整形外科専門医でsubspecialty医師を育成します。また、リハビリテーションの専門医も育成したいと思っています。研究に関しては、昨年も国際学会のSICOTなど多くの賞やグラントの受賞もあり大変嬉しい年でした。臨床に関しましても教室員一丸となり治療にあたり、手術件数も一昨年の1300件を超えております。多くの症例を経験することはレジデントの先生にとって良い機会ですので、是非多くのことを学んでほしいと思います。また、新しく開始される専門医制度では様々な領域の疾患を経験する必要があります。多くの認定施設が単独では研修できなくなる可能性がありますが、保存療法はもちろん手術症例だけでも十分経験できるのが宮崎大学病院整形外科の特徴の一つです。同門の先生方には入院待ちなどでご迷惑をお掛け致しますが、今後医師会との前方連携・後方連携が進むと思いますので、ご協力・ご支援をお願い致します。またこの場をお借りして、日頃多くの患者さんをご紹介頂き心から感謝申し上げます。

さて教室には３名の新入教室員を迎えるこ

とができました。とても嬉しい知らせです。レジデントの先生である戸田雅先生、三股奈津子先生は、希望に満ち溢れた新たな出発点となりましたので、夢と目標をもって診療・研究・教育にあたって頂きたいと思っています。臨床に関してはまず専門医をとり、その後少しずつスペシャリティを考え、もちろん研究に専念したい場合は大学院へ進むことも貴重な体験になります。夜間大学院もありますので活用してください。運動器を扱う地方の整形外科医は、自分の専門を二つ以上持つことが大切と私は考えます。将来の医師過剰時代の到来に備え、より研鑽して下さい。また、前述の田野病院は医学部附属病院コミュニティメディカルセンターと位置付けられました。その運営基盤の確立や教育強化の観点から麻生飯塚病院のリハビリテーション科部長の黒木洋美先生に入局してもらいました。リハビリテーションは地域医療分野において今後益々重要な位置を占めます。田野病院には介護施設もありますので、卒前・卒後教育に将来を見据え介護医療も学んで頂きたいと思います。このように教育制度や施設など受け入れ体制は充実していますので今後も多くの教室員が増えますよう教室員のみならず同門の先生方のご協力もよろしくお願い致します。

新臨床研修制度により、研修医が中央の病院へと集中したため、関連病院への医師の派遣が不可能となり、地方の病院、しいてはその地域の患者さんに不安な思いをさせることになっております。また、開業されたり故郷に戻られる先生方もおられ私たち教室員同様に苦境に立たされていますが、幸い教室・同門の先生方のご理解・ご支援によりなんとか乗り切ることができています。お詫び申し上げるとともにより一層のご協力をお願い致します。

次に、「ロコモの新しい判定法」について述べます。ロコモを評価する際メタボなどと比べ基準となるものが数値化されていませんでしたので、国民に説明しにくいとの意見がありました。そこで日整会では新たな判定法としてロコモ度判定法をリリースしました。この「ロコモ度判定法」では立ち上がりテスト、２ステップテストとロコモ25を用い評価します。是非参考にしてください。

ロコモ啓発や予防はより一層積極的に進めていく必要があり、引き続き様々な取り組みを実施していきます。さらには高齢化社会、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、より一層「スポーツメディカルランド宮崎」、「ロコモザワールド宮崎」構想を進めていきたいと思っております。

今年度は、ここ宮崎で大きな学会が２つ控えています。7月4日に宮崎観光ホテルで開催します「日本運動器科学会」、11月14，15日に宮崎市民プラザで開催します「西日本整形・災害外科学会」です。無事にこれらの学会が成功しますようご支援ご協力ならびに多くの先生方のご参加をよろしくお願い致します。

最後になりましたが、新たに入局していただいた先生方を加え、教室員の和を大切にし、質の高い臨床・研究を実施し、学内外連携を推進し開かれた特徴ある臨床外科系講座として貢献したいと思っております。そのためにも、教室・同門の先生方のご指導・ご鞭撻を、これまで以上によろしくお願い申し上げます。

目　次

御　挨　拶…… 河　野　雅　行

新入教室員歓迎…… 帖　佐　悦　男

田島直也先生 喜寿祝賀会 …… 渡　邊　信　二…… 1

教授就任10周年

帖佐教授就任10周年を迎えて…… 川　野　啓一郎…… 4

帖佐先生　教授就任10周年おめでとうございます。…… 柏　木　輝　行…… 5

メインテーマ　～教室40周年を迎えて～

教室40周年によせて…… 田　島　直　也…… 7

４０年…… 伊　勢　紘　平…… 9

開講四十周年おめでとうございます。…… 市　原　正　彬…… 11

教室40周年を迎えて…… 税　所　幸一郎…… 13

教室40周年を迎えて？…… 栗　原　典　近…… 14

教室40周年を迎えて…… 小　島　岳　史…… 15

学会賞受賞

平成25年度整形災害外科学研究助成財団エーザイ奨励賞および第32回日本骨代謝学会学術集会優秀ポスター賞を受賞して…… 黒　木　修　司…… 18

第９回宮崎整形外科医学奨励賞受賞にあたって…… 山　口　奈　美…… 21

医局長挨拶

医局長挨拶…… 濱　田　浩　朗…… 23

同門会・医局行事

2014日整会野球大会を振り返って…… 石　田　康　行…… 25

西日本整形外科野球大会を終えて2014－１軍－…… 小　薗　敬　洋…… 26

H27年日整会サッカー予選を振り返って …… 永　井　琢　哉…… 28

平成26年度同門会ゴルフコンペご報告…… 江　夏　　剛…… 30

同門会テニス大会報告…… 渡　部　正　一…… 31

麻雀大会報告…… 松　山　順太郎…… 33

野球検診報告2014…… 石　田　康　行…… 34

医局旅行……横　江　琢　示……36
日整会スポーツラグビー大会について……今　里　浩　之……38
1年間を振り返って……39
新規開業
開院のご報告……山　本　恵太郎……41
新入会員紹介（正会員）
新入会員挨拶……黒　木　洋　美……42
新入会員挨拶……戸　田　　雅……43
新入会員挨拶……三　股　奈津子……43
同門会総会議事報告……44
教室同門の研究業績（2013年度）……46
編集後記……79

田島直也先生喜寿祝賀会

渡邊信二

平成25年9月23日（祝）に名誉教授の田島直也先生の喜寿をお祝いして宮崎観光ホテルにて祝賀会がとり行われました。

これに関連してお世話をさせていただきましたので一筆献上いたします。

わたくしが整形外科教室に入局したのは平成４年６月でした。その頃は田島教授といえば野球という印象で、水曜と土曜の朝練は研修医のdutyでした。眠たい目をこすりながらマフラーの壊れたおんぼろ車に乗って大学の球場に向かったものでした。田島先生の教授在任中に全国優勝は果たせませんでしたが、あの頃の練習があってからからこそ、今の野球の成績が残せたのだろうと思います。ちなみに後に田島先生は野球練習のときにアキレス腱を切られました。その時の術者と助手は帖佐教授とわたくしでした。

臨床では脊椎とスポーツを専門とされ、意欲的に研究や臨床に邁進されている姿は後進の我々の手本となるものでした。今わたくしが行っている脊椎の診察法もこの頃に教えていただいたもので田島スタイルを受け継いでいるものと自負しております。

回診では患者一人ひとりの前でプレゼンしなければならず、何か突っ込まれるのでないかと前日から検査値を暗記するなど準備していたことを思い出します。

また、教授退官後も県整形外科医会会長などの重職を歴任され、今現在も教室の運営に大きく貢献いただいております。

このように我々の指導者である田島先生が７７歳の喜寿を迎えられました。これは教室を挙げてお祝いしなければということで、帖佐教授や同門会役員の承認を得て計画を立ててまいりました。当初は同門会総会と同じ日に計画していたのですが、誕生日から2か月以上離れておりましたので2014年9月23日の祝日に計画いたしました。

まずは衣装の選択でした。喜寿の色は紫ということで、普段使いもできるようにモンクレールのダウンジャケットを探していたのですが、直営店では紫の取り扱いがなく、紫色のスーツを贈ろうということになりました。紫単色のスーツではいくら高貴な色の紫でもちょっと下品で、ほかの業界の集まりと思われるかもしれないし、後々使っていただけないだろうということで、教室の女性スタッフと思案した結果、紫のピンストライプが入ったグレーベースのスーツを選びました。後日談ですが田島先生が「紫一色のスーツを着させられるのでないかとドキドキした」とおっしゃってたのが印象に残ってます。宮崎市内の某有名デパートにお願いしたのですが、若者が着ても地味にならないシックなスーツができたと思ってます。シャツは薄い紫でネクタイとカフスも併せて選びました。

また、77歳まで大病をすることなく力強く仕事に尽力された田島先生を支え続けて下さった令夫人への感謝も忘れてはなりません。お2人で温かく静かな晩酌を楽しんで頂きたく、対のタンブラーも贈らせて頂きました。どちらも末永くご愛用頂きたいと思います。

祝賀会で披露させていただくプレゼンテーションの作成も大変でした。できる限りたくさんの写真を集めたのですが、絶対あるものと思っていた写真がなかったり、これは使っていいものかどうか不安になる写真も出てきたりして、苦労したのですが、スライドを作るのは大変楽しい時間でした。

さて、祝賀会当日ですが、田島先生御夫妻をお出迎えし、ホテルの一室でお着替えなどの準備していただきました。全体の集合写真の撮影を行ったのですが、その前に田島先生個人とご夫婦での写真も撮っていただきました。そして108名の同門会員・来賓の集まる中、起立して盛大な拍手で田島先生ご夫妻を祝賀会会場でお出迎えいたしました。

まずは帖佐教授、河野医師会会長からのお祝いの言葉をいただき、当時の２階東病棟の婦長である岩見様に見事なお祝いの詩吟を披露していただきました。記念品としてはご夫婦で旅行を楽しんで頂こうということで旅行券と前述のペアのタンブラーなどの目録が押川紘一郎先生から贈られました。水永副看護部長からの花束贈呈の後に、田島先生からのご挨拶を賜りました。７７歳とは思えないほど矍鑠とされた御姿は主任教授当時と変わっておらず、言葉の一つ一つに教室への想いが満ち溢れていました。

そして、宴会の始まりです。田島先生の後

を継いで県整形外科医会会長に就任された川野啓一郎先生による乾杯にて会食が始まりました。

帖佐先生によるプレゼンテーションでは田島先生が今までに手掛けられた学会の数々と功績が数知れず、スクリーン上を賑わせていました。「第6回日本腰痛研究会」から始まり、「第80回西日本整形・災害外科学会」「第2回日米整形外科スポーツ医学会」「第19回日本整形外科スポーツ医学会」「第30回日本側弯症学会」「第2回日台整形外科シンポジウム」「第25回日本臨床バイオメカニクス学会」「第99回西日本整形・災害外科学会」「第11回日本臨床スポーツ医学会」「日本脊椎脊髄病学会」と全国レベルの学会を田島先生の指揮の下、教室員が一丸となって取り組んでいた記憶が鮮明に蘇りました。

また懐かしい野球大会や忘年会などの医局行事のスライドや出席者に頂いたお祝いのビデオレターの場面では大きな笑いも出て、和やかな雰囲気の中で会が進行してまいりました。

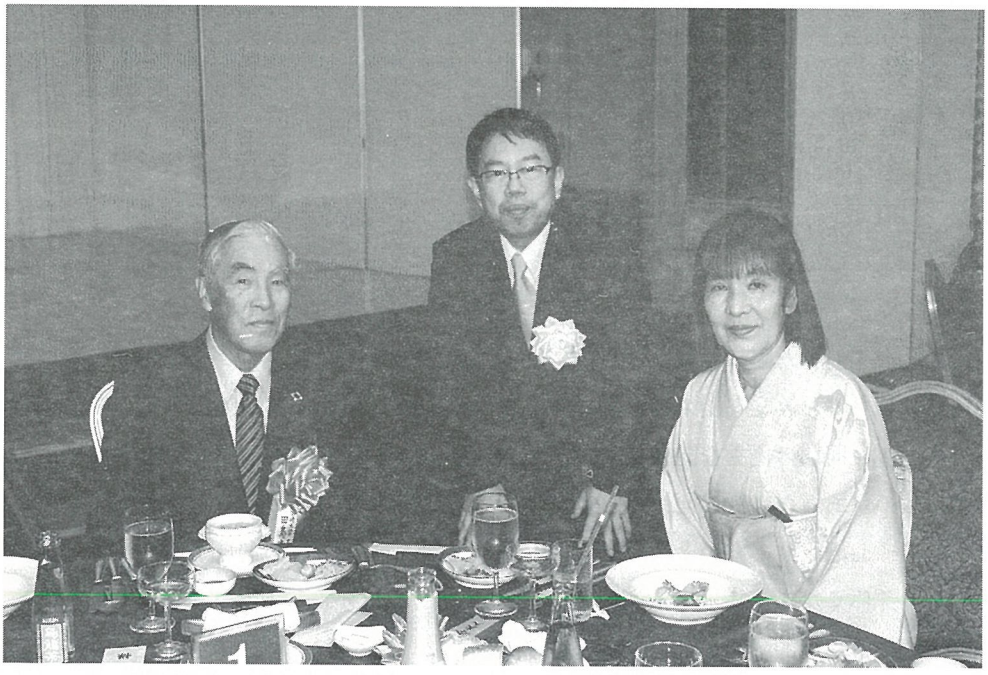
祝賀会最後は市原正彬先生に万歳三唱で締めくくっていただき、参加者全員でのゲストアーチにてご退場いただきました。会場入り口では医局の若いもんによる胴上げがあり、田島先生御夫妻とお孫さんが出席者全員に声をかけながらお見送りされておられました。

喜寿祝賀会が無事に終わりほっとしてます。

私達は田島先生の門下生であることを誇りに思っていいます。これからも何かできることがあれば何なりと申し付け下さい。

教室員一同、心よりお祝い申し上げます。くれぐれもお体ご自愛下さい。

今後もご指導宜しくお願い申し上げます。



帖佐教授就任10周年を迎えて

川 野 啓一郎

帖佐助教授が三代目の教授に就任する前に、医局の先生に尋ねられたことがあります。その時は、その先生の期待に反した答で申し訳ないと思いながら教授という立場になられたら、どうしても変わらざるを得ないというような話をした記憶があります。

ところが、私の予想は全く外れたものとなり、教授就任10年を経た現在でも以前のように、気さくで偉ぶらない、細かい所まで気を配り、我々や患者さんの質問要求にも短時間で対応してくれる“教授らしからぬ”教授でいらっしゃると思います。

それは本来の温厚な性格の上に、同時に多分野の問題を処理できる緻密な頭脳があるからできることであろうと、日頃から敬服しています。そのようなマルチ人間ということから言えば、先代の田島教授によく似た所があると感じています。

帖佐教授が入局した際に私は、医局の中堅の立場で勤務しておりましたので、よく覚えておりますが、同期の優秀な先生方の中でも何か光るものがあったように記憶しています。

ただ唯一、お酒が飲めないという欠点がありました。「偉くなるためには酒も飲めなくてはダメだ」と理論的に酒飲みを正当化させながら、いっしょに飲みに行くことが多かったのですが、すぐ顔を赤くして、しばらくすると眠り込んでしまう状態で、私としては何とも張り合いのない思いをした事でした。

ところが、その後研鑽を積まれ、今では他大学の来賓教授とも対等にお酒のつき合いが出来るまでになられ、教授として言う所なしの状態です。テレビ、新聞、雑誌等で全国的に知名度の高い帖佐教授の働きを、同門のひとりとして誇らしく思っています。

初代木村教授が二代目田島教授にバトンタッチし、そして田島教授が三代目を育成した所から、我が宮大医局は、仲の良さでは全国屈指です。

毎年の同門忘年会に三代の教授が揃って出席する医局も少ないのではないでしょうか。教室の先生方と同様、我々同門も大いに恩恵を受けている所であります。これからも同門の一員として微力ながら教室を支えて行くお手伝いをして行く所存ですが、帖佐教授にはくれぐれもお体を大切にして頂きたいと思っております。

宮崎大学整形外科学教室のますますの御発展をお祈り致しております。

帖佐先生　教授就任10周年
おめでとうございます。

橘病院　柏木輝行

学内、学外はもちろん県内、県外で活躍される先生の姿は益々大きくなる教室と共に素晴らしい御活躍だと思っております。
10周年を機会に更に教室が発展されていく事をとても楽しみに思いますし、期待感で溢れているのではないでしょうか。

たくさんの帖佐先生との思い出がありますが、特に印象に残っているのは帖佐先生と一緒に発表した股関節学会の事でしょうか。17，８年程前になりますが、帖佐先生と二人で演題を毎年たくさん出し、たくさんの発表をしておりました。帖佐先生も私も二題、三題と発表し第1会場から第５、第6会場と更に下の先生の発表される会場まであちこち駆け回っていた記憶があります。その当時、京都府立大学の久保先生がやはり若い先生とたくさんの発表をしており、その発表数で競い合ったものでした。

更にもう少し古い話しになりますと、長鶴先生と帖佐先生と私で、同じように学会で発表し毎年色々な思い出があったものです。その中で、黒木浩史先生と四人で学会に行った時の事です。第1日目の発表が終わり、私は仕事の都合でどうしても帰らなければならず、それは帖佐先生も長鶴先生も納得して頂いた事なのですが、宿泊先の都合もありホテルから旅館に移りました。シングルで泊まっていたホテルから旅館は三人部屋でした。食事が終わり、帰るときにその部屋をちらっと覗くと三つの布団がなんと川の字に敷いてありました。その時点でおかしくておかしくてたまらなかったのですが、丁寧に挨拶をして帰りました。4人なら部屋わりが変わったのですが、3人になったので仕方ありませんでした。黒木浩史先生が後ろから追っかけてきて、「柏木先生、嘘でしょ…うそでしょ・・・」と涙目で私に訴えました。「本当に帰るんですか…嘘でしょ…」と本当に涙がこぼれそうでした。私はおかしいやらかわいそうやらでしたが、私は「仕方がない」と言いました。当然その三つの布団には、長鶴、帖佐、黒木、いや長鶴、黒木、帖佐の三人で寝る事になるのだろうなと思いながら宮崎に戻りました。帰りの飛行機の中で三人の姿を思い浮かべると、決して笑ってはいけない、と思っても、おかしくておかしくてたまりませんでした。川の字の布団が今も鮮明に思い出されます。仕方なかったとはいえ、はめられてし

まった黒木先生が、後日、また涙目と怒りの目で私に話しをしてきました。あの夜、帖佐先生のいびきと長鶴先生の歯ぎしりでほとんど寝られなかったそうです。そして朝起きた時、長鶴先生に「浩史、お前のいびきうるさかったで、なに考えてんねん」と怒られ、ぐっすり寝ていた帖佐先生にも「うるさかったがあ」と、てきとうに怒られ、すいませんすいませんすいません、と謝りながら学会場に向かったそうです。次の日の宿泊はさらに悲惨で、移動したホテルでツインのベッドに間にエキストラベッドをおいて、なんと川の字体制再び・・だったそうです。

帖佐先生と私と県立日南病院の松岡知己先生で松山の学会に行った事がありました。道後温泉に入り三人で飲んだ後・・・が、これは書くことができない内容で残念です。

帖佐先生と様々な股関節学会での思い出があり、楽しい学会生活でありました。帖佐先生は、地下鉄や空港ではとにかく急いで歩く。決して止まらずに歩く。エスカレーターも止まらずに右を登る。どうしてこんなにせかせか歩くのかわかりません。動きの止まらない先生で口も体も本当にノンストップな生活で大丈夫なのかなと思いながら、いまだに相変わらずお元気な姿をみて安心しております。しかし、もうそろそろペースを考えて体の事を気遣って頂きたいと思っております。私も今後の帖佐教授のご活躍と教室の発展に微力でも貢献できるように力を注ぎたいと思っております。これからも頑張って下さい。

教室40周年によせて

宮崎大学　名誉教授　田島直也

宮崎大学整形外科教室は此度40周年を迎えることになりました。

私が教室に在籍したのは、昭和54年11月から平成15年3月までの23年5ヶ月でした。

整形外科教室の歴史を振り返ってみますと、前身の宮崎医科大学は昭和48年に大学準備室ができ、49年6月7日に開学しました。宮崎医科大学の開学の柱として「医の倫理に徹した人間形成を基盤に高度に発達した医学知識を習得させ、信頼しうる臨床及び医学教育者を育成する」とあります。新設医大の創設目的としては、まず地域医療の充実が上げられました。整形外科学教室の方は、熊本大学整形外科教室から木村千仞講師が、整形外科主任助教授として赴任され、ここに宮崎医科大学整形外科学講座が誕生致しました。当初は、県立宮崎病院内の木造空き家の病棟で机1個椅子1脚からのスタートであったと伺っております。

開講当初の5年間のことは、私はいろいろな人にお話を聞くだけですが、研究棟・病棟の建設された時期であり、まさに創世期で色々な面でご苦労が多かった事が十分想像できます。

初代木村千仞名誉教授は一昨年に米寿を迎えられ、教室同門主催で平成25年12月に祝賀会が開催され、現在も御健在でいらっしゃるのは誠に喜ばしい事であります。

私は、昭和54年11月に長崎から助教授として着任し、その後平成2年4月から平成15年3月まで主任教授として勤めさせていただきました。

昭和54年頃は教室員も5～6名でしたが、次第に出身大学が異なる入局者も増えてきました。

全員のコミュニケーションをはかる目的もあり野球を取り入れました。しかし初めは院内医局対抗戦でも敗戦が続きましたが、私が退官する頃には全国トップクラスのチームになっていました。

私が主宰した期間は、木村千仞初代教授が作られた教室の充実・発展期にあたり、発展途上の教室として教育、診療、研究面に精一杯頑張ったつもりでしたが、今考えると反省点も多く残ります。

学会の方は平成5年に第2回日米整形外科スポーツ医学の日本側代表となり、学会をハワイで開催し、その他全国規模の学会として、第19回日本整形外科スポーツ医学会(平成5年7月)、第30回日本側彎症学会(平成8年11

月)、第25回日本臨床バイオメカニクス学会(平成10年11月)、第6回日本腰痛学会(平成10年11月)、第11回日本臨床スポーツ医学会(平成12年10月)、第31回日本脊椎脊髄病学会(平成14年6月)等を開催しました。学会を開催することは負担も大きい面もありますが、自分達の研究成果を発表し、パネル、シンポジウムに参加できるチャンスでもあります。しかし、学会開催にあたり、同門のほか県医師会の先生にも多大の協力を頂きましたことをあらためて御礼申し上げます。

さて、平成16年5月から帖佐悦男教授が教室を主宰され、現在に至っていますが、専門の股関節領域の他、スポーツ医学関係、リハビリテーション医学では日本を代表する第一人者として広く活躍されていることは御承知の通りであり、又、関本朝久講師を中心とする研究面も素晴らしい業績をあげられていることは同門として喜びにたえません。

長い歴史からみると、40周年は1つの通過点であります。しかし、ここで過去を振り返り、臨床、研究面とも世界水準を視野に発展していってもらいたいものです。

40年

伊勢紘平

先日医局の方から1通の依頼状が届きました。その文面を見て「えっ！もうそんなに経ったのかな」というのがいつわらざる心境でした。思い返してみますと、私が宮崎医大に赴任したのは、昭和49年9月だったと思います。当時は、整形外科には木村先生が助教授でおられ、玉井先生は宮崎医科大学の学長格でいらっしゃたのみで、整形外科としては木村先生と私の二人だけという淋しい世帯でした。当時他の学科（医学系）としては、第一内科学講座・整形外科学講座・第一外科学講座・病理学講座・微生物学講座・第一解剖学講座の6講座であったと思います。もちろん大学もなく、県立宮崎病院の敷地内に大学の準備室が設置され、その場所で上の先生方は大学をどのように作っていくかという相談をされており、着々と大学を作っていかれる設計をなさっていたような時代ですし、私などはまだ研究の途中でしたので、2週に1度は熊本にゆき、実験をするというような生活をしていました。49年6月に開校でしたので、一年生がすでに入学しており、いわゆる教養の講義はされていた訳です。まだ、大学病院もなく、臨床の研鑽を積むということは出来ませんので、私達は宮崎の県病院（宮崎・延岡）、それに熊本の同門の先生方のところで研修をさせていただきました。

その後、矢野先生、武田先生、河野先生、大野先生、岡田先生、栄先生、押川先生、税所先生と、各大学から宮崎に関係のあった先生方が入局して来られ、大学病院も出来、やっと医科大学という名前にふさわしい陣容になりました。今考えてみますと、当初は木村教授の下に私が講師として働かせてもらい、河野、矢野、押川、岡田君らが助手として働いていましたが、現在の人数に比較してとても多いといわれるものではなく、本当にぎりぎりの人数で医局が成り立っていたと思います。

もちろん関連病院もそんなにある訳でなく、木村先生のご苦労は並々ならぬものであったなあと思います。本当に今考えてみて感謝以外何物でもありません。

その後、田島先生が長崎大学より助教授として来て頂きました。教室のいろんな事をやっていただくという事で私は熊本に帰るということになり、以前に勤務していました熊本市民病院に勤務しました。平成2年に田島先生が教授になられた時に縁あって再度、宮崎医大に勤務させて頂いた訳ですが、その頃

は40年前の状況ではなく医局員も多くなり、新教授に変られて前の医局とは別の雰囲気を持った教室の中で楽しく勤務させて頂いたと感謝しています。若かった頃には仕事が終わると皆で「今日は飲もうか」といいながら市内に出かけたり本当にたのしかったものです。今の医局の皆さん方に他の教室との学問的付き合いと、遊びの付き合いが出来ていればいいなあと思いますし、また、それをする事によっていろんなヒントが生まれるという事を思い出して頂ければと思います。

今後の更なる発展を期待しています。

開講四十周年おめでとうございます。

市　原　正　彬

宮崎医科大学整形外科教室の開設及び開講後の事はその当時、その場その場に居合わせた先生方がそれぞれの立場で見たり聞いたりされた事をお書きになると思いますので、そのもう少し前の事を書かせて頂きます。

亡くなられた山田文夫先生が御存命でしたら詳しくお話になる事でしょうが。昭和四十八年末頃急に熊本大学整形外科教室の中で、玉井達二教授が熊本を去られて新設の宮崎医科大学の整形外科教室の教授兼副学長として近日赴任されるとの噂が流れました。当時私は、熊本大学院終了後国立再春荘で二年間の勤務を終え、宮崎県立延岡病院へ派遣されたばかりの頃でした。私共の年代の医局員達は、学生時代からダンディでスマートで若さあふれた玉井教授のお人柄にあこがれて入局する者が多く、私もその最たる者の一人でした。

熊本から殆んどなじみの無い宮崎での生活を余儀なくされていた私にとって恩師が突然宮崎医大の教授として宮崎の地へ来られるという事は本当に晴天の霹靂の如きうれしさで、自分は好運の持ち主だと舞い上った覚えがあります。

実際には宮医大は、副学長と教授との兼任は不可との事で当時熊大の講師だった木村千仞先生が急遽同教室の初代教授として宮崎へ来られる事となった訳ですが、それからの宮医大整形外科教室作りは施設の準備、人集め、そして附属病院が出来る迄の県立病院、その他の病院での仮住まい等々言語に絶するご苦労だったともれ承まわっております。更にそれ以上に、六年間は卒業生の出ない中での医師確保は本当に大変だったろうと思います。

新設の大学にとって旧帝大医大等　百年以上の歴史をもつ大学医学部とはその地域への浸透度が異なるだけに四十年経った現在でも帖佐教授の医局員集めのご苦労が尾を引いているものと考えられます。私自身で云えば、宮崎で間もなく学長になられた玉井教授とお会いする機会も度々あり、又県立延岡病院に大学病院での実習の代りに来られる新設大学附属の医師の先生方とのお付き合いもあり、私の病院の当直等もして頂いた事もあり、しかも主任教授は熊大医局時代の先輩として可愛がって頂いた木村千仞先生が教授をされているという事もあり、すっかり宮医大の整形外科教室の医局員又は、同門会々員と同じ感覚で以後四十年間楽しくおつき合いさせて頂きました。宮大整形外科教室の中で育ち医局

員から勤務医更に開業医へと沢山の先生方が巣立っていく様子を私はその中で、又は傍からじっくりと見させて頂いてますが、古い又歴史の長い、大学には無い連帯感が宮大の同門の先生方の中には色濃くあり親しみ深い雰囲気を持っています。

四十年の間に三代にわたる主任教授の下で出来上った大切な伝統を今後も同門会員の全員の方々が壊す事なく続けて頂きたいと思います。因みに最初の宮大整形外科のスタートを切られた玉井達二先生は平成十七年六月二十四日に亡くなられて熊本の地に御自身の手で作られた墓地に眠られていましたが、二十七年二月御家族の手で熊大整形外科教室同門会員のお見送りの中、先生の生まれ育った関東の地へと、その御遺骨はお移りになられました。

稿を終わります。

教室40周年を迎えて

国立病院機構都城医療センター　副院長　税 所 幸一郎

整形外科教室開局40周年おめでとうございます

国立病院機構都城医療センター（都城病院から平成27年4月1日に名称変更しました）からお祝い申しあげます。私は入局37年目を迎え、現在は当センターでリウマチを中心とした診療を行っています。私が入局した昭和54年は木村先生が教授に就任された年で、また大学病院もフルに稼働し始めた年でした。その当時の教室員は木村教授以下、新入局の私を含めて9名で、40床の病床を診ていました。木村教授はリウマチを専門に診療をされていましたが、現在寛解導入ができるといわれているメトトレキサートや生物学的製剤などはなく、その当時は抗リウマチ剤といえば金製剤だけでしたので、治療に大変苦労されていました。また手術については人工関節がようやく日本で行われるようになり、大学でも人工膝関節全置換術がクリーンルームで宇宙服に身を包み慎重に行われていました。手術は朝9時に開始し夕方に終了するという、その当時としては大変な手術でした。リウマチ治療の黎明期で、このようなことからか？、教室員にはリウマチはあまり興味を持たれなかったようです。その時期に、私は大学院に進学しました。木村教授から頂いたテーマが「リウマチの肺」であったことから、いつの間にか私はリウマチ診療の道を進むことになりました。木村教授は退官後、市民の森病院のリウマチセンター長に就任されました。私も、その後平成4年から国立都城病院に勤務するようになり、都城で“0”からリウマチを創めました。現在、RA患者が400名前後となり、生物学的製剤などの薬物治療、リウマチ外科手術などを行っています。また研究ではNinJaなどの研究班にも属しております。大学関連施設の中で、都城医療センターはリウマチをする病院として、教室員の研修、教室の発展に少しでも貢献できればと思っています。そして宮崎大学整形外科教室がますます発展しますとことを祈念します。

教室40周年を迎えて？

宮崎県立延岡病院　栗原典近

え、私でいいんですか？同門会誌担当が石田先生だから、同期の私と言うことでしょうか？ほかに適任者がいそうですが・・・

私は平成8年入局ですので、今19年目。ほぼ教室の半分ということになります。私が大学6年生の時、帖佐教授が医局長をされていらっしゃいました。私の代の同期入局者は9人と、最後のビックウェーブを迎えた年でありました。あの頃はあみだくじで次の派遣先をどこに行くか決めてましたね（遠い目）。大人数でしたのでとにかく賑やかだった印象です。

大学に残っている同期は、河原先生が開業した今、石田先生が最後の砦となっています。がんばれ。

現在の延岡病院に来たのは長男が小学2年生の時でしたが、現在高校3年です。月日がたつのは早いものです。私の持病の腰痛も年々悪くなるはずです。

私が脊椎グループにいたのは、実は短くて、2年半ほどでした。それで今脊椎班というのもおこがましく、延岡に来てからあちこち勉強に行かせていただいて、なんとかやっています。うちに来た先生はご存じでしょうが、宮崎大学と熊本大学のハイブリッド、ほぼ自己流です。

外傷の手術もしていますので、脊椎3：外傷7みたいな感じでしょうか。

延岡に来たばかりの時は木屋先生を含めて7人でした。それまでは一番下の先生がオンコールをして、上の先生は手が負えないときのみ、コールされていました。私が待機表を作るようになって、そのときいた熊大の先生と喧嘩して、ほぼ均等に急患の待機を行うようにしました。4月から延岡病院は5人から4人になりました。今年44歳です。そろそろつらくなってきました。

脊損、骨盤骨折が来たら、涙が出そうです。ヘリを有効利用予定です。濱中先生、中村先生よろしくお願いします。ぜひ延岡に来たい人、大募集です。

結局何が言いたかったかと申しますと、どこも大変なんで強く言えませんが、県北は結構大変ですよ。また増やしてください、ということで。よろしくお願いいたします。

教室40周年を迎えて

小島岳史

平成15年卒業。今年で13年目になる小島です。私は今年37歳なので、生まれる3年も前から教室が存在していたのかと思うと、歴史の重みを感じずにはいられません。入局して13年しかたっていない身分で40年を語るのは何ともおこがましいと思われますので、現在教室について感じていることを徒然なるままに書きたいと思います。

最近になってようやく気づきました。教室とはずばり「家族」みたいなものなんだと。

表1：家族と教室の共通点

	家族		教室	
誕　生	おぎゃーと生まれる。	0歳	おぎゃーと入局。	医者0年目
幼児期	何もかも親頼み。	1～2歳	右も左も分からない。すべてオーベン頼み。	医者1～2年目
幼少期	自分でいろいろできるようになる。	3～12歳	自分で手術執刀させてもらえるようになる。	医者3～5年目
反抗期	もう親はいらないと思い始める。	13～18歳	天狗になって有頂天。何でもできると勘違い。	医者6～10年目
青年期	親元を離れ、初めて家族のありがたみに気づく。	19歳～現在。	教室のありがたみを知る。	医者11年目～現在。

医学部は6年生まであり、少なくとも24歳まで一般社会と関わる機会があまり多くありません。そのため社会常識を欠いたまま医師になってしまうことが多いと思います。私も数多くの無礼や失敗を出向先の病院でやらかし、その数たるや教室40年の歴史があるといえどもトップレベルではないかと自負しております。しかし行く先々で寛大なる先輩方が、途中でさじを投げることなく指導してくださいました。まるで家庭で子どもを大事に育てていくように。

こうして、私も何とかまともな（？）医者になってきたような気がしています。

家族（教室）があってはじめて赤ちゃん（ひよっこ医師）はまともな大人（まともな医師）になるんですね。

とか言っている間に教室内でもそろそろ青年期を迎え、いつの間にか後輩を指導してい

かなければならない立場になってしまいました。なかには、自分自身を思い出させるヤンチャな後輩先生もちらほら見かけるようになりうれしくなってしまいます。私も途中でさじを投げないように、今まで諸先輩方から指導いただいたことを今度は後輩に伝えていこうと思っております。

そこで、この13年間で教室内で学び自分に戒めている言葉をいくつかご紹介いたします。

①新しい赴任先に行くときに心がけること

「守・破・離」

題名は失念しましたが、何かの自己啓発本に書いてありました。職人が師匠から教えを請う場合に踏むべきステップだそうです。守：まずは師匠の技をまねる。破：その技を壊して、新しいものを創造する。離：自分の技を確立し師匠から離れる。この順番が大事であることを知る前の私は、新しい赴任先においては「破・守・離」の順番を踏んでいました。いきなり「破壊」から始まると必ずトラブルに見舞われますのでお勧めはできません。ただ、最初から「破」で入ることもありだと思っています。もちろん師匠がものすごく寛大である、という前提条件が必要ですが。「雨降って地固まる」ではないですが、「破」のあとの「守」が、「破」の前の「守」より意味のあるものになることもあるのでは？と勝手に信じています。

②　「無識の指揮官は殺人者なり」

日露戦争の連合艦隊参謀の秋山真之の言葉らしいです。私はこれを、「新しい医学知識を取り入れない医師は、その後輩医師を殺してしまう。」と置き換えて肝に銘じています。なので、「今までこの治療で困ったことないから、その新しい方法を導入する必要はない。」という言葉は絶対使わないようにしています。

③「Evidenceはだれが作るの？おれでしょ」

新しい手術デバイスが大好きな私は、若さゆえにまずいちばん最初に使ってみたくなってしまいます。しかし、「エビデンスが出るまで、もう少し待ったほうがいいんじゃないの？絶対あとで問題出てくるでしょ、このデバイス！」と同期の腐れ縁の三橋先生に注意され、よく飲み屋でケンカしていました。そこで私が言い返して生まれた言葉です。この姿勢がいいか悪いかは分かりませんが、何でも言い合える同期との中で生まれた言葉なので大事にしていきたいと思っています。

④「臨床・基礎に関わらず、その研究結果は投稿、査読を経て論文として印刷され広く配布される。そのことによって、はじめて第三者の追試、さらなる批判を受けることが可能となる」

⑤「科学的文献に基づく報告を核としないで臨床に従事することは、民間医療を行うことを意味する」

上記２つは、私を学生時代から熱心に指導してくださっている先輩先生からいただいた言葉で、出典は他大学の同門会誌です。どうしても、出向先の病院にいると学会活動や論文執筆などサボりたくなってしまいますが、この言葉が書かれたものを印刷して常に目の届くところに置き、自分にムチを打っています。

⑥「たけし！遊んでばっかりおらんで、
　ちょっとはおれの役にたたんか！」
帖佐教授に怒られるときのフレーズです。
がんばります。

教室40周年とまったく関係のない話になってしまいました。次の50周年にむけて、益々の教室の発展を願っております。私も微力ながら、その発展に寄与できればと思っています。

図1：反抗期まっただ中の自分と、まだまだ反抗期現役の花〇先生と（5年前くらい）

平成25年度整形災害外科学研究助成財団エーザイ奨励賞および第32回日本骨代謝学会学術集会優秀ポスター賞を受賞して

黒木修司

今回、整形災害外科学研究助成財団より「平成25年度研究助成エーザイ奨励賞」をいただき、平成26年5月21日に神戸ポートピアホテルにて行われた贈呈式に参加して参りました。また平成26年7月24日～25日に大阪の国際会議場で行われました、第32回日本骨代謝学会学術集会におきまして、「優秀演題ポスター賞」を受賞することができました。どちらも「可変型遺伝子トラップ法を用いた骨代謝に関与する新規遺伝子群の効率的スクリーニング」という研究タイトルでの受賞で、この場をお借りして受賞報告をさせていただきたいと思います。

現在、私たちは関本朝久先生を中心に熊本大学との共同研究で、遺伝子改変マウスを用いて、骨代謝に影響を及ぼす可能性のある遺伝子を探索する研究を行っています。帖佐教授や同門会の御理解もいただき、研究環境は少しずつ整ってきていますが、研究費用は継続的に必要となるため、私たちは科学研究費はもちろんのこと、毎年多くの助成金募集に応募して参りました。今回受賞しました整形災害外科学研究助成財団へもH23年度から応募し続けおりました。助成金の応募には詳細なデータをわかりやすく記載する必要があり、毎回のことですが申請書を作成するだけでも大変です。さらに当科では関本先生の厳格なチェックがあり、提出までには何度も何度も御指導いただきましたので、受賞を聞いたときは喜びもひとしおでした。また関本先生からも繰り返し応募し続けることの重要性を聞いていましたので、あらためて諦めずに応募してよかったと実感しました。

贈呈式には全国から21名の受賞者が参加し、それぞれ基礎的・臨床的な研究内容が報告されました。先進的な内容ばかりでなく公衆衛生的な大規模調査や一般的な外傷後の合併症に関する研究など身近な問題でも受賞されていて、研究テーマは身近にもあることを再認識しました。

日本骨代謝学会は骨代謝に関する基礎から臨床までを網羅した学会で、整形外科以外にも解剖学や病理・生化学、歯科口腔外科や放射線科、内科や婦人科、さらには農学部や工学部など多岐にわたる分野の先生方が参加されます。私たちは大学院に入り、この日本骨代謝学会と日本整形外科学会基礎学術集会に少しずつ積み重ねた研究内容を発表してまいりました。今回は学会期間のレセプションでの授賞式があり、整形外科だけでなく様々な

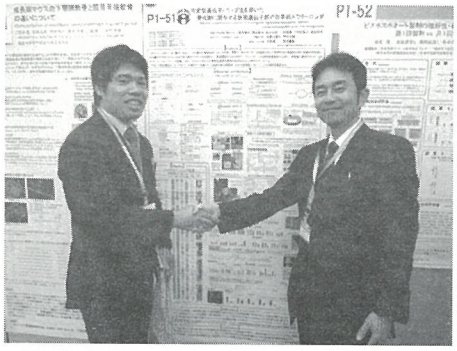
分野の先生と受賞できたのは、大変刺激になりました。

現在私たちが行っている研究についてですが、骨代謝に関わる細胞は骨芽細胞、破骨細胞、骨細胞のわずか3つですが、そこで働いている遺伝子、タンパク質についてはまだまだ不明なところが多いです。その解析手段として有効な手法が「評価対象の遺伝子を破壊するとどういう現象が起こるか」というシンプルな観察、実験することです。

遺伝子を破壊する技術は確立されており、これを精力的に行っている施設の一つが、関本先生が大学院で研究をされた熊本大学生命資源研究・支援センターです。その時から現在のテーマの構想を持っていたそうですが、具体化の機が訪れたのをみて共同研究が開始されました。「EGTC」という熊大が作ったデータベースで遺伝子を破壊したマウスの情報が公開されていますが、そのうち骨に変化がありそうなマウスをピックアップして当教室に譲渡して頂き評価しています。サンプルは熊大にお願いしてから1年以上を要する、非常に貴重で先進的な技術の賜物ですが、当科での評価実験そのものは臨床の延長上にある基本的なものです。例えばCTの撮影、骨密度の計測、血液検査、病理組織学的検査などを行います。また臨床ではありえない手法ですが、モデルマウスでの実験ですので大腿骨を摘出して実際に折って強度を調べたりします。さらに現在は遺伝子改変したES細胞（すべての組織に分化する能力を保ちながら、ほぼ無限に増殖させる事ができる幹細胞）を用いて、同様に骨代謝に影響を与える遺伝子の評価もできないか、その手法を検討しています。

これらの実験は研究棟２階と３階に必要なすべての実験機器を配した研究室を帖佐教授に整備していただいて遂行しています。現在も可変型遺伝子トラップ法を用いた遺伝子改変マウスのスクリーニングは継続しており、昨年度から中村志保子先生が研究に加わり、また本年度からは育休だった大田先生が復帰され、あたらしく永井琢哉先生も少しずつ研究に参加いただくなどマンパワーが充実してきました。帖佐教授のご配慮を頂き、マウス飼育や研究の専門的な手技をお願いできる実験スタッフも相馬さん、土持さん、永田さんの3名で充実して頂いております。

私の研究テーマは「可変型遺伝子トラップ法を用いた骨代謝に関与する新規遺伝子の探



索」ですが、スクリーニングの結果、有意な表現型を示す遺伝子改変マウスも少しずつ見つかってきており、そのひとつひとつのマウスを精査し学会発表を行ったり、論文作成するなど研究室のみんなで研究対象を「総論」から「各論」へ広げています。若手の先生方も研究テーマや研究環境としては入りやすい状況になってきていると思いますので、興味ある先生は是非声をかけてください。今回の研究助成金および優秀演題賞の受賞は、このテーマで研究を立案実現してきた、帖佐教授、関本先生、一緒に研究している舩元太郎先生や大学院の大田智美先生、中村志保子先生また実験スタッフの助力によるものです。改めて感謝の意を表したいと思います。

第9回宮崎整形外科医学奨励賞 受賞にあたって

宮崎大学医学部　整形外科　山口奈美

この度、歴史ある宮崎整形外科医学奨励賞を受賞させていただくこととなり、この場をかりまして、同門会の先生方に厚く御礼申し上げます。

2001年に医師国家試験に合格して以降、大学病院や関連病院で諸先輩方の御指導を受け、いつの間にか中堅といわれる年齢になってきました(目の前のことで精一杯だった研修医時代が昨日のことのようです)。

さて、今回の受賞テーマは「スポーツ活動と運動器検診」ということで、それぞれについて紹介させていただきます。

まず、県内での取り組みであります「運動器検診」ですが、2005年度に全国4地域で開始され、2007年度から山本先生を中心とした宮崎グループも参画しました。私は立ち上げ当初野崎東病院に勤務しており、初年度は関わっておりませんでしたが、2008年度から少しお手伝いするようになり、2009年に大学病院勤務になってから本格的に関わるようになりました。運動器検診は今年度で9年目を迎えますが、初年度5校だった検診校も年々増加し、現在では80校を超えています。また、学校数の増加に伴い検診対象者も増加し、昨年度までに延べ44176名の児童・生徒を対象に検診を行ってきました。

検診方法(図1)は、一次検診および二次検診から成り、一次検診は直接検診と問診票の双方から評価し二次検診対象者を判定しました。二次検診は、個人で医療機関を受診してもらいその結果を各医療機関からFaxで大学に通知していただきました。一次検診、二次検診の結果から推定罹患率を計算すると、それぞれ15.7%(2007年度)、8.3%(2008年度)、9.5%(2009年度)、9.3%(2010年度)、9.0%(2011年度)、8.4%(2012年度)、8.5%(2013年度：2014年9月末までのデータ)でした。2007年度は現行の方法と異なっていたこともあり、推定罹患率が15%を超えましたが、ほぼ現行の方法で検診を始めてからは8～9%で毎年推移しています。この推定罹患率は、現在行われている学校検診に含まれる他疾患の被患率と比較しても高い値であり、運動器検診を学校検診に取り組む必要性を示唆していると考えます。また、二次検診を受診した児童・生徒の約70%は、当該部位に対する医療機関の受診歴がなく、運動器検診が運動器疾患の早期発見や早期治療の一助となると期待されます。

来年度から運動器検診が学校検診に組み込まれることになり、現行の運動器検診は今年度が最後となることが予想されます。一次検診で宮崎県内を走り回って下さった先生

方、二次検診でお世話になりました先生方には、運動器検診に御協力頂き本当に有難うございました。山本先生、河原先生が繋いでくださったバトンを今後も繋いでいきたいと思います。今年度も御協力の程よろしくお願い致します。

次に「スポーツ活動」ですが、宮崎県内ではマッチドクターや大会の救護、メディカルチェックや講演活動などを行ってきました。対外的な活動としましては、主に女子サッカーの代表活動を行ってきました。2004年1月に初めてU-19サッカー女子代表に帯同し、それ以降各年代の代表に帯同してきました。2006年に発足したU-16女子代表(吉田監督)では、公式戦を含め約1年間チームを担当する機会があり、その後2011年のユニバーシアードや2013-14年のU-16/17女子代表(高倉監督)を担当し、昨年コスタリカで行われたU-17W杯では1か月間チームに帯同しました。決勝戦が地上波で放映されたこともありご覧になった先生もいらっしゃるかもしれませんが、決勝でスペインに勝利し、アンダーカテゴリーではありますがW杯優勝を経験することができました(図2：優勝メダル)。決勝は5万人を超える観客の中での試合、表彰式にはコスタリカ大統領やFIFAのブラッダー前会長などが臨席され、表彰式終了後には満員の観客の中場内一周を行うなど、選手を含めわれわれスタッフも初めての経験ばかりでした。日本から30時間以上かけての移動、15時間の時差、30°を超す気温、慣れない長期の海外生活など、この年代の選手にはかなり過酷な状況だったと思いますが、選手達は本当によく頑張ってくれました。大会期間中色々な問題はありましたが、最後まで離脱者を出さずに大会を終了できてよかったと思います。

このような代表活動ができますのも、「行って来い」と言って下さる先輩方や私が留守の間病院業務を代わって下さる先生方の御理解と御協力あってのことだと思っています。御迷惑をおかけしている先生方への感謝を忘れず、これからも代表活動に関わっていけたらと思います。今後とも御指導・御鞭撻の程よろしくお願い致します。

図１：検診方法

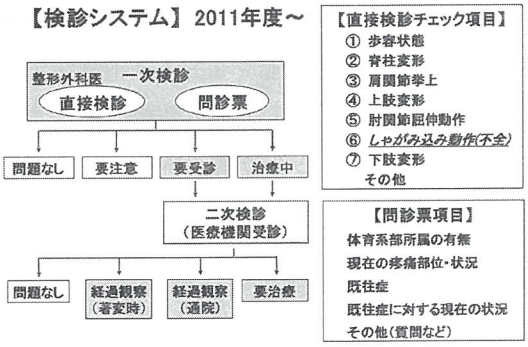
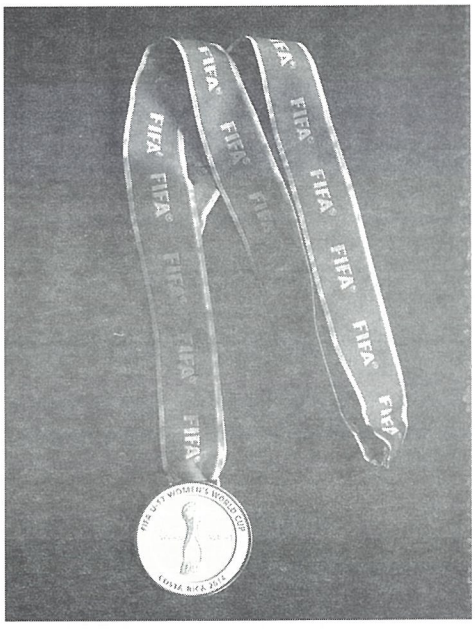


図２：優勝メダル



医局長挨拶

濱田浩朗

新年度となりました、医局長の濱田でございます。昨年度は皆様に多岐にわたりご協力いただきまして誠にありがとうございました。紙面にて失礼ではございますがここにお礼を述べるとともに、いろいろと見苦しいところをお見せしたことを陳謝し今後の教訓とさせていただきますことを申し添えさせていただきます。

さて、今年は田野病院に黒木洋美先生、また大学病院に戸田雅先生・三股奈津子先生をお迎えできたことを非常にうれしく思っております。個々の先生方からは別紙にてご挨拶があることでしょうから割愛させていただきますが全てにおいてマンパワーが増える事こそ、諸処の問題解決の最善の策であることと思っております。

ご存知のように宮崎県における新研修医の2年間の研修は大学や県病院、提携病院など個々の病院のカリキュラムにそって行われるわけでありまして、今年度の宮崎県の新研修医62名の中で本学での研修予定者は36名であります。各施設の研修プログラムを受けている新研修医が半分弱いるわけですので、私どもで手の届かない所で研修されている先生方がいらっしゃいましたらぜひ入局を薦めていただきたいところであります。くれぐれも私がドローンを飛ばさねばならない事態にだけはならぬよう願っております。

ご存知とは思いますが、当科入局後はホームページに記載されておりますように各グループを半年ずつ計1年半の研修を行っていただきこの間に腫瘍・小児・関節炎・脊椎などを含めた日整会の求める症例を全てそろえていただき、その後関連病院において主に外傷を経験し専門医受験が可能となるよう魅力あるプログラムを組んでおります。どうも専門医を取った後は自学自習のような様相になっておりますが、

自己研鑽をつむ機会はなにも書物を読みあさるだけではありませんし、独善的な知識になりがちですので、専門医を持っていらっしゃる先生方も魅力あるローテーションということで、ぜひ大学に帰ってきていただき、関節鏡などの技術を学ぶもよし、腫瘍・先天性疾患の症例を経験するもよし、救急をするもよし、研修医の頃と違った目でカンファレンスに参加することができるでしょうから、ご一考下さいますようお願い申し上げ

ます。さらにこれによって皆さんがご経験されたスキルを皆に教示していただく事も出来てお互いに研鑽を積むこともできるわけです。留学・研修もしかりで、それができるようにそして各々の希望が生かせるよう2年のスパンで異動を実施するよう指示されております。

また、学位取得に関しましては現在、論文博士（乙）は有りませんので必然的に大学院（昼・夜間）に入学することになります。今は甲乙の区分はありませんので大学院のみ博士号が取れるのですが夜間大学院もあり年齢制限もありませんので、長い人生、ここで学生になってみるのも一興ではないでしょうか。

今年は山本恵太郎先生・河原勝博先生がご開業されました。おめでとうございます。両名とも健康に自信がある先生方ですので精力的に在宅医や医師会当直をこなしていかれるでしょう。医師会・整形外科医会活動の参加など勤務医とは違った仕事また、経営など医療以外に考えねばならないことなどなど多岐にわたり棘の道でしょうが、同門の先生方の指導の下、精進されるよう祈っております。同門の一番のメリットは困った時にお互い助け合いさらに、医局が全面的にバックアップさせていただく所にありますので、すでにご開業の同門の先生方・勤務医の先生方もこの点はご遠慮されずにご連絡下さい。

最後に退局された桐谷力先生・小牧ゆか先生におかれましては長い間、教室員としてご協力いただきご苦労様でした。新たな環境にて戸惑うことも多いでしょうがご健勝のほどお祈りいたしております。今年は宮崎にて「日本運動器科学会（7月）」「西日本整形災害外科学会（11月）」が開催されます。手伝ってくだされば なお嬉しいですが、お会いできるのを楽しみにしております。

2014日整会野球大会を振り返って

石田康行

2010年の夏より安藤徹、前キャプテンの後を引き継ぎ、野球部キャプテンをさせていただきました。今回この2014年日整会野球大会を最後に、小薗敬洋先生に引き継がせていただきます。同門の先生には日々の診療で大変な中、選手派遣に御協力いただき感謝いたします。今後とも御協力の程よろしくお願いいたします。

選手の高齢化が進む状況の中、若手選手の補強がなく、開業等で参加できない選手も増えギリギリの状況でチームを編成しています。参加してくださった選手は各自けが等がある中、チームのために頑張ってくれました。感謝いたします。

今回は神戸での開催でした。初戦は昨年も対戦した信州大学でした。全国大会では以前より対戦する強豪校です。全国に両チーム知れ渡っており、前日の抽選会で会場がどよめくほどの対戦でした。長澤先生の先発で挑みました。先行で、1番安藤先生の出塁後、2番有住先生の送りバントで2塁に進め、4番小薗先生のタイムリーで一点手堅く先取しました。初回は相手チームを3者凡退に抑えたのですが2回に相手の重量打線につかまりました。その後、長澤先生も精神力で立ち直り頑張ってくれましたが残念ながら敗退してしまいました。

この年になり、体も動きませんがチームのために一丸となって野球に参加できていることに感謝しています。試合に出た選手、ベンチでチームのために力を尽くしてくださった選手お疲れ様でした。野球ができる喜びを感じながら、今後も自分にできることを探して参加していきたいと思っています。

今後とも、同門の先生方には御支援、御協力よろしくお願いします。

西日本整形外科野球大会を終えて２０１４－１軍－

小 薗 敬 洋

平成２６年７月２７日に第５７回西日本整形外科親善野球大会が久留米にて行われました。

九州北部は前週に梅雨明けし、台風２０号の影響で前日まで小雨がぱらつく天気でしたが、試合当日は晴れ、最高気温３４度の真夏日となりました。

チーム平均年齢が４０歳を超え、元気がいい２０代が一人もいないベテラン集団となり、最少失点で守り勝ってきた試合運びが年々難しくなってきました。そのため得点力アップを念頭に練習試合など調整を行い、大会に臨みました。

前夜祭の抽選の結果、九州・琉球・福岡・熊本大学といった強豪チームと別ブロックになり、その上２回戦からという好条件に恵まれました。

初戦は鳥栖市民球場で佐賀大学と対戦（余談ですが広島東洋カープの緒方孝市監督は鳥栖市の英雄のようで、球場の看板表示には『鳥栖市民球場　緒方孝市選手この地より飛翔』の文字が大きく掲げられています）。初陣ならではの緊張感の中、長澤－川添のバッテリーで試合が始まりました。ともに３回まで０が並ぶ展開となりましたが、ようやく４回裏に２アウトから長澤・安藤・有住・三橋の４連打で一挙５点を奪い先制。相手投手が代わった５回裏にも得点し、５回コールド（７－０）で勝利をおさめました。先発した投手長澤は、２安打完封と圧巻の投球でした。

続く準決勝は、久留米市野球場に場所を移して鹿児島大学と対戦。日整会野球大会の出場権を賭けた大一番は、松岡－福嶋のバッテリーに託されました。２軍戦から合流した帖佐教授をはじめ、７人が控えでスタンバイする万全の態勢で試合開始。しかし先制したのは鹿児島大学でした。投球の鍵となるインコースのコントロールが定まっていない立ち上がりに、ヒットに失策が絡んで３点を奪われました。反撃したのは４回、四球で出塁した走者を繋いで１点を返し、５回には２アウト２・３塁から５番打者谷口のタイムリーヒットでさらに２点を返しました。前の試合で好投した長澤が５回から再登板するも追加点を奪われ、２点のビハインドで最終回を迎えました。守りから入っていた左翼手関本に代わって、ピンチヒッター石田が技ありの右翼線２塁打で出塁し、２アウト後に９番打者松岡が左翼越えの２塁打を放ち１点差まで迫りました。一発が出れば逆転サヨナラの場面、

これまで数知れずチャンスに結果を出している１番打者安藤に打順がまわりました。チーム全員の期待を背負いフルスイングで捉えた鋭い打球は、惜しくもセンターのファインプレーに阻まれ、ゲームセットとなりました。改めて試合を振り返ると失点は仕方がないものの、相手投手を一巡目の攻撃で捉えられなかったことが悔やまれる試合となりました。本年度の日整会野球大会の出場権は得られませんでしたが、８月３０日（日）に長崎で行われる予定の親善野球大会では、再び優勝を目指して頑張ってまいります。これからも応援のほどよろしくお願いします。

H27年日整会サッカー予選を振り返って

永井琢哉

天気にも恵まれ絶好のサッカー日和の中、3/22に鹿児島県北薩広域公園にて、日整会サッカー予選(8人制です)が行われました。例年のごとく宮崎・鹿児島・大分の3大学での総当たり戦にて、本戦出場を争いました。

初戦はここ2年本戦に出場している、ライバル大分との試合でした。膠着する展開の中、前半残り1分で左サイドからドリブルで抜け出した横江先生の絶妙なクロスに樋口誠二先生が頭で合わせ、値千金の先制ゴールを決めました。後半も追加点を取りたいところでしたが、相手のロングフィードが永井の頭上を抜け、シュートを受けました。キーパー小島先生の正面にくる何気ないシュートでしたが、まさかのファンブル。こぼれ球を詰め

られて同点となりました。後半途中で李先生が投入されました。森キャプテンの采配が見事に当たり、混戦から李先生が押し込みました（一説にはオフサイドだったとかなかった

とか…）。このまま勝利をつかめると思いきや、ペナルティーエリアの近くで大倉先生がファウル、見事な直接フリーキックを決められ、再び同点となり、2-2で試合終了となりました。なかなか勝利できない試合の厳しさを感じました。

2戦目は大分VS鹿児島、0-2で鹿児島が勝利し、最終戦は勝つしかない状態での鹿児島との対戦でした。体力を温存できていたこともあり、終始宮崎がボールを支配していました。前半、コーナーキックから大倉先生がゴール隅にヘディングシュートを決め先制しました。しかし、その後追加点をあげることなく、後半に突入しました。幾度となくゴールポストにあてていた横江先生がようやくミドルシュートを決め、安心したのも束の間、相手コーナーキックから押し込まれ、重苦しい空気が流れました。しかし、去年とは違う落ち着きを見せ、センターリングから樋口先生がゴールをあげ、その後横江先生がミドルシュートを決め、ほぼ勝利を手中に収めました。残りわずか、満を持して深尾先生が出場。ファーストタッチで体ごとゴールをねじ込み、ゴールの中で雄たけびをあげました。最終的に5-1で勝利、日整会本戦出場を決めました。久々の本戦出場決定でみんなの笑顔を見ることができ充実した一日となりました。

最後になりましたが、同門の先生方の御支援・御協力があってからこそ、このような大会に参加できるのだと感謝しております。本戦ではみなさまにいい報告ができるよう頑張って参りたいと思います。

平成２６年度 同門会ゴルフコンペ　ご報告

江夏　剛

平成２６年度の第２３回同門会ゴルフコンペが、平成２６年１１月３０日ハイビスカスゴルフクラブで行われました。

市原正彬先生、木屋博昭先生、長澤誠先生と一緒に回らせて頂き、念願の初優勝させて頂く事が出来ました。

父に教わったゴルフも、始めて３５年程になります。父の兄弟がゴルフ愛好家であった為、厳しく教えられました。１００を切るレベルにならなければコースには連れて行ってもらえなかった為、自宅でのパター、アプローチ、練習場での父のお下がりのドライバー（当時はパーシモン）アイアン（マクレガーのまさに鉄の板のような）の練習を父と一緒に連れて行ってもらい、高校１年生の時、初めて母智丘カントリークラブをラウンドさせてもらいました。当時は庶民的なスポーツではなかった為、ブレザーを着せられ入場したのを覚えています。

市原先生は、私が医師国家試験に落ち浪人の身である時に、先輩の関本先生と同級生の安藤徹先生と美々津カントリークラブをご一緒させていただいてからのご縁で、先生がお元気にまたご一緒させて頂けたことを大変うれしく思いました。

木屋先生のゴルフのご高名さは伺っておりましたので、一度ご一緒させて頂きたいと思っておりました。噂に違わぬ腕前で、後半はパープレイで回られて来られたのには感服致しました。

長澤先生はお仕事のお疲れからか、いつもの調子が見られませんでしたが、いつもの上手さはよく存じ上げております。

今回すばらしいパーティに恵まれ、ダブルペリアの恩恵にも恵まれ初優勝することができました。

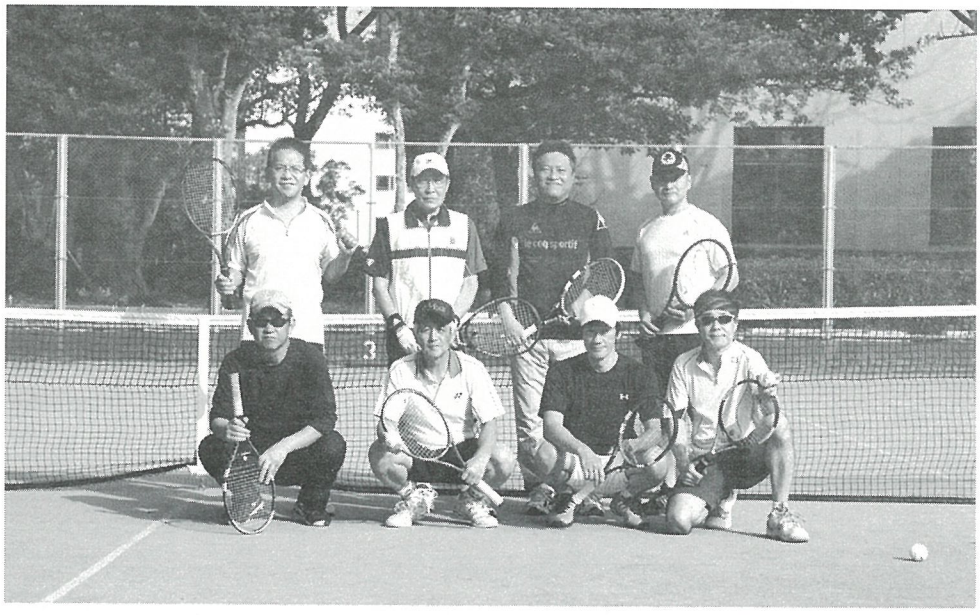
諸先輩や後輩の皆様とこうしてプレイが出来ることを考えると、ゴルフの有り難さをつくづく感じます。益山先生を目標に、今後も精進して参りたいと思っております。

同門会テニス大会報告

渡部正一

平成24年11月23日、第17回宮崎大学整形外科同門会テニス大会が開催されました。今年も恒例の「勤労感謝の日」開催で、「テニスで日々の勤労を感謝しお互いを慰労しよう」と同門有志8名の先生方のご参加を頂き、今回は宮崎駅東口近くの中央公園テニスコートにて熱戦が繰り広げられました。

学生時代から現在までずっと硬式テニスを続けておられる方、卒後にテニスを始められスクール等で技術を磨かれている方、軟式テニス（現在はソフトテニスと言います）からの転向組、そしてわたしのような彗星系の不定期参加者まで、経歴も年齢も多彩なメンバー構成でした。共通することと言えば、「テニスを愛し仲間を大切に思う整形外科医」ということでしょうか。わたくしも久しぶりに参加させて頂いてラケットも新規に購入して臨んだのですが、頭の中で描いた動きと実際の自分の体の動きがあまりに乖離していることに驚嘆・落胆いたした次第です。しかし、久しぶりに味わうことのできた「シュポッ」というテニス独特の打感は、ボールを追う事でいつの間にか心地よい疲労感を伴ってくる運動効率の良さと相まって、このス



ポーツの良さをまた心から感じさせてくれるものでした。同時に、先輩方のレベルの高さ、ご健在ぶり、「テニスは紳士のスポーツである」と言われる由縁などを十二分に堪能させて頂けた貴重な時間となりました。

試合は、それぞれが全員とペアを組む形でのダブルス戦（4ゲーム先取）で、各試合の取得ゲーム数の合計で順位が決定されました。「優勝者は年末の同門会の檀上で挨拶をし、同門会誌に寄稿し、次年度の幹事も受け持つ」という大変な名誉（厳しい掟？）が与えられるということで、今回は幸運（？）にもわたくしめがその大役を仰せつかることとなりました。これはきっと諸先輩方が「あいつはこういうことから逃げ回っているので、今回こそは懲らしめてやらなければならん」と暗黙の了解の元に成された結果であろうとわたし自身は信じて疑いません・・(笑)。

ともあれ、本大会が今回も無事成功したことをご報告いたします。

また来年も、最低限同じメンバーで、そして是非とも新たなメンバーのご参加を心からお待ちいたしております。

麻雀大会報告

松 山 順太郎

毎年恒例の麻雀大会ですが、今回私自身3回目の参加をさせていただきまして、大会の報告をさせていただきます。宴会の後、ややほろ酔いの状態で8名の有志が集い、盛大に大会が開催されました。日頃、なかなか人が集まらず麻雀が出来ない私にとって、この大会は毎年とても楽しみにしているのですが、偉い先生方のいるなかでも和気あいあいとした雰囲気でとても楽しい大会になりました。特に、今年は河野先生が医師会長になられたということもあり錚々たるメンバーになったわけですが、私自身恐縮している風ではあったのですが麻雀では図々しくも上がらせていただき二回目の優勝の運びとなりました。

同門会員には麻雀のために入会したわけではないのですが、こうなってくると来年も優勝を目指して研鑽を積みたいと考えております。皆様も来年は是非ご参加いただき一緒に大会を盛り上げて頂ければと思います。

今年は、メディカルシティ東部病院での勤務だけでなく4月より新設された都城医師会病院でも微力ながらお手伝いをさせていただく予定でおります。宮崎に来て3年が経ちますが宮崎で働けていることにとても喜びを感じております。これまでも、木屋先生をはじめ個人的にも多くの先生方にお世話になり感謝に堪えません。今後も、諸先生方にご指導いただきながら宮崎で働かせていただければと思います、どうぞよろしくお願いいたします。

野球検診報告2014

石田康行
帖佐悦男
長澤　誠

野球は国民的スポーツで広く普及し、将来有望な多くの少年野球選手がいる反面、overuse等で野球肘となり野球を続けられないばかりか日常生活にも支障をきたす選手が出現しているのも事実です。野球肘の中でも上腕骨小頭離断性骨軟骨炎（小頭OCD）は治療に長期間かかり、適切な治療が行われないと手術が必要となり障害が残存することがあります。しかし、小頭OCDは早期発見すると、手術せず保存療法で障害なく治癒します。そのため、小学生の時期での野球検診は有効です。帖佐教授は全国規模で"子供に笑顔を野球傷害を防ごう"プロジェクトを立ち上げ、統一した野球検診の普及に努められています。その一環として宮崎でも2010,より少年野球検診を行ってきました。2014年12月に今年度の少年野球検診を行いましたので報告させていただきます。

今年度2014年の参加者は宮崎県少年野球連盟に所属する希望者506名でした。
予防、教育のため選手、保護者に検診が必要な理由、野球肘の病態についての講義を受けてもらいました。

その後、今後の予防のためにコンディショニング指導を行い、診察、エコーの一次検診を行いました。

一次検診で二次検診該当者が出た場合は引率者、保護者に同意を得た後、即日二次検診を行いました。同意が得られなかった場合は近医への紹介状を作成しました。

一次検診異常者は116名(23%)でそのうち二次検診即日受診者は115名(99%)でした。我々の検診は、従来の試合会場で行う検診と異なり、できる限りその日に二次検診を行うので二次検診率が高いのが特徴です。二次検診受診者の異常部位は92%が肘関節でした。その肘関節異常者の56%は内側障害、12%は外側障害（小頭OCD）でした。検診で見つかった小頭OCDは11肘でその10肘は初期でした。1肘のみが進行期でした。検診は早期発見、早期治療に有用でした。

検診後の経過を調査してみました。小頭の広範囲な病巣で初期に発見されていた選手が、整形外科に通院していたにもかかわらず広範囲なまま復帰していたケースがありました。この時期に広範囲に骨軟骨が遊離すると高度の可動域制限が生じ、手術を行っても可動域は回復せず、関節症変化が進行し、機能障害が残存します。保存療法は外側より修復します。完全修復が理想ですが、完全まで行かず

中央部のみ病変が残存した場合でも関節鏡での手術で大きな障害が生じず野球に復帰できます。そのため、広範囲な初期の保存療法はより重要です。同門の先生方の病院に受診された際はよろしくお願いします。ご不明な場合はいつでもご紹介ください。

検診を行っても障害が減り、予防が各チームで行われなければなりません。われわれも機会を作り、野球障害の病態、予防に対する啓発、活動に力を入れていますが、各地域で同門の先生方のご協力よろしくお願いします。

今回も野球検診に御協力いただいた医局員、理学療法士、看護師、事務等有志の皆さんありがとうございました。皆さんのおかげで救われている選手がたくさんいます。しかし、近年、ご協力いただけます同門の先生方が少なくなってきています。協力していただける先生は是非、宮崎大学整形外科にご連絡いただければ幸いです。

医局旅行

横江琢示

平素より大変お世話になっております。2014年度入局の横江琢示といいます。今回は2015年1月8日から12日までシンガポールに医局旅行で行かせていただきましたので復命をさせていただきます。

1月初めといえば、例年のごとくインフルエンザ流行の時期であり大学病院においても流行していました。特に整形外科では数人の医師が罹患しており、あと一人病棟内でスタッフに罹患者が出現した場合には医局旅行中止という状況でした。なにがなんでもシンガポールに行きたい、これは参加者皆が強く望んだこと。私も出発直前はおそらく発熱しており、I先生もものすごく調子が悪そうでしたが出国審査を無事終了しシンガポールへと向かうのでした。今回の旅行では全てが大切な思い出となりましたが、いくつかその中から抜粋して書かせていただきます。

一番の思い出はホテル近郊のものすごくまずい露店での朝食です。シンガポールといえば世界3大夜景の一つ、マリーナベイサンズと華やかな印象がありましたが少し歩けば決して綺麗とはいえないスラム街のような地域となります。同じ部屋であったH先生は「きったない不味い物でも食べないとアジアに来た感じがしない。お腹こわしたい。」とおっしゃいましたので「確かに。」と思い、朝食付きのホテルであったにも関わらず毎朝きたない露店で朝食を摂ることとしました。テーブルの周囲にはゴミ袋が置きっぱなし、ハトは飛びまわっておりなかなかすごい環境でした。そんな状況でもなんとか美味しいものが食べたいと思うのが人間のサガなのでしょうが、どれも一口食べたら二度と食べれないような食べ物ばかり。H先生もほんの少し食べただけで満足し、すぐに腹痛と戦う毎朝でした。

シンガポールといえば、マリーナベイサンズがとても有名であり屋上のプール、カジノ、巨大ショッピングセンターは皆さんご存知の事と思います。カジノは行きたいと思っていたのでいくこととしました。カジノの中に入ってびっくりしました。ものすごく広く、そしてたくさんの人々。中国系の富豪がたくさんやってきては豪遊しているみたいで、1日で約1億円の稼ぎが出るとバスガイドのかつらの方はおっしゃっていました。初日は負けてしまいましたので、翌日行くか迷いましたがこのまま帰れないと思い連夜行きました。2日目は初日の負けを取り返すだけ勝ったの

でよかったです。私以外にも看護師さんも含めたくさんカジノに行っていましたがtotalではマイナスであり、カジノは基本負けに行くものなのかと知らされました。I先生は夜通しカジノで遊んでいたみたいですが、負けたのに関わらずとても楽しそうでギャンブラーが医局にもいることを感じました。その他にもマーライオン、ナイトクルーズ、ナイトサファリ（ずっと私は寝てましたが）、ベイサンズの最上階にあるbarでのシンガポールスリング、1998年に日本サッカー代表が初めてW杯出場を決めたジョホールバリ見学などたくさん楽しい思い出ができました。

そもそも海外での医局旅行は2014年にたくさん入局したから(といっても4人ですが)という理由で許可されたとのことです。私たち4人のために海外医局旅行を決定していただいた帖佐教授をはじめ、たくさんの医局員の先生方、特に大学で留守番していただいた先生方、看護師の方々にこの場を借りて深く感謝申し上げます。ただ、今回の旅行で一つだけ大きな後悔があります。それは同期の今里先生がインフルエンザのためシンガポールに同行できなかったことです。彼もとてもシンガポールを楽しみにしていましたので、いつか機会があれば同期で一緒にシンガポールに行きたいですね。

さて、桜の花も散り始めて整形外科2年目の生活が開始しようとしています。まだまだ未熟者であり、気を引き締めて取り組んでいきたいと思っておりますので今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

日本整形外科スポーツ学会 ラグビーについて

今里浩之

H26年入局の今里浩之です。2014年9月12日から行われた虎ノ門ヒルズで行われた日本整形外科スポーツ医学会に、帖佐教授並びにスポーツグループの先生方のご配慮で、H26年入局の4人（今里、平川、横江、齊藤）は演題を提出し、初めての学会発表をする機会がありました。

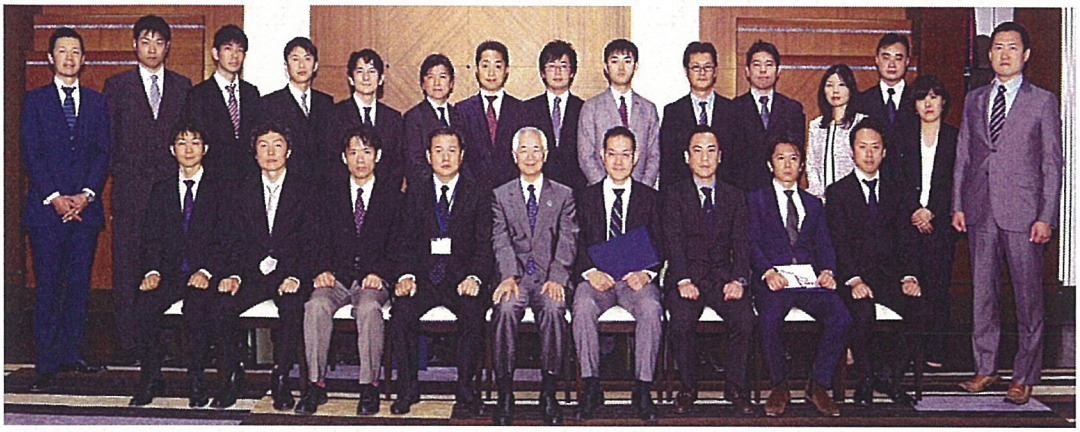
学会発表の準備を直前まで必死に行い、いざ東京へ。われら東京さ行くだ！東京でも、ホテルの一室で何度も原稿を読み、緊張をほぐします。そして本番へ！

申し訳ございません、発表はしどろもどろになりながら何とか完遂できましたので、置いときまして・・・、学会では初となる試み、日整会の野球、サッカーに次ぐ早朝ラグビー大会がありました。

日本各地のラガーな先生方と、遠方からにも関わらず田島卓也先生を筆頭に異常なほど参加者の多い宮崎大学（比嘉Dr、今里、平川、横江、斎藤、研修医篠原）で、二日酔いでガンガンする頭で、AM6時からグラウンドでガンガンラグビーです（勿論、コンタクトプレーはなしでした、おじさんたちが壊れてしまいますからね）。宮崎大学は、その参加者の多さで場の空気を支配！3チームに分かれましたが、3チームでひたすらに笑いと爽やかな汗を生み出しておりました。終われば、もちろんノーサイドです。青白い顔をしたおじさんたちが、誰が飲んだかわからないアクエリアスに必死に飛びつき、回し飲みです。ゴキュゴキュ。これぞノーサイドです！

非常に楽しい（つらい？）初めての学会発表となりました、貴重な経験ありがとうございました。今後も一層精進してまいります、よろしくお願い申し上げます。

1年を振り返って



整形災害研究助成報告会　H26.5

野球大会　H26.5

大学院セミナー　H26.6

合同歓送迎会　H26.7

喜寿祝賀会　H26.9

喜寿祝賀会２　H26.9

日本整形外科スポーツ医学会　H26.9

ひむか市民公開講座　H26.10

高次脳機能障害市民公開講座　H26.10

ＳＩＣＯＴ　H26.11

西日本整形・災害外科学会　H26.11

野球検診　H26.12

開院のご挨拶

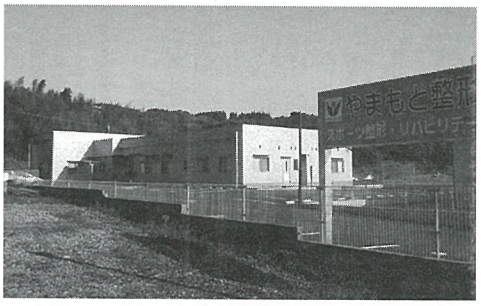
やまもと整形外科　山本恵太郎

平成27年2月23日に宮崎市池内町において『やまもと整形外科』を開院させて頂きました。場所は、宮崎西環状線沿いで、2月10日には（新）相生橋が開通し、宮崎市街のみならず宮崎西IC方面からのアクセスも良くなりました。開院し、まだ2か月も経ちませんが、ウグイスの囀りや保育園の音楽が聞こえたり、周囲には山桜や菜の花が咲き、少し長閑な場所ですが居心地が良く非常に気に入っています。

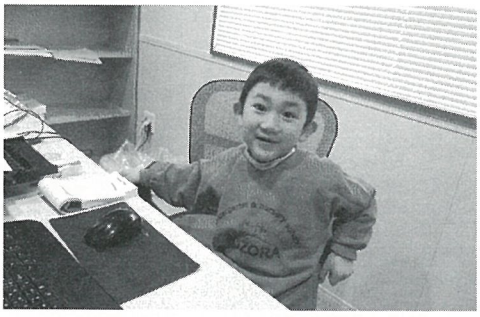
自分は平成６年入局しましたが、新卒が１人だけ（現在の新研修医制度前では唯一のこと）で、皆様に可愛がっていただきました。2年目は県立延岡病院で熊本大学の先生方、3年目は県立宮崎病院で九州大学の先生方に交じって研鑽させて頂き、今でも交流させて頂いております。大学での13年間はスポーツ・上肢グループに所属し、田島名誉教授・帖佐教授が進めたスポーツメディカルランド宮崎の取り組みや運動器検診の確立などに参画し、同門会から第2回宮崎整形外科医学奨励賞を頂くまでの発展お一助に関与できたことは非常に有難かったです。（運動器検診については、平成28年4月より学校保健で必須化になりますので、同門会の先生方もご理解・ご協力頂ければ幸甚です。この場を借りてお願い申し上げます。）最後の赴任地の宮崎江南病院では関連病院の部長という大役で、自分の未熟さを露呈するばかりでしたが、患者さんとしっかり向き合えましたし、良い意味で良い経験をさせて頂きました。

入局して21年、田島名誉教授・帖佐教授はじめ教室の先生方ならび同門会の先生方には感謝の念で一杯です。今後は、一開業医として、これまでの経験を生かし微力ではありますが、宮崎の地域医療に貢献できればと考えております。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

今年、広島から宮崎に来て30年になりました。“宮崎が大好き”です。



病院外観



チビ院長 in 院長室

新入会員自己紹介（正会員）

名　　前：黒　木　洋　美

生年月日：1966年11月23日

出身高校：県立高鍋高校

出身大学：琉球大学（5期生）

初めまして。同門会に参入できることを心から嬉しく思います。

Self PR

特徴：小柄（150cm前後）、見た目は若造り（？）、活気あり

好きなもの：

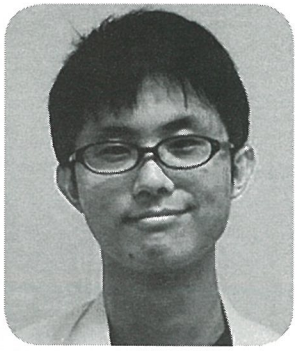
＊動物ならなんでも。でもとちらかというと犬派です。ヨークシャーテリアを20代から飼い続けています。現在2匹と同居生活中。将来、庭付きの大きな家に沢山の犬と戯れる生活が目標です！

＊車も好き。乗るのも見るのも好きです。乗ってみたい車はコペン新型です。今は愛車C4（シトロエン）のしなやかな走りが心地良いです。

＊運動好き。身体を動かすことも大好きです。学生時代は、バスケット、ワンゲル部。沖縄でダイビングを堪能。福岡では、病院内で山登り会に参加。九州は山登りには最適な環境です！

＊アルコール好き。Beer党ではありますが、なんでもいけます。ちなみに学生時代は泡盛で鍛えられました。

リハビリテーション医として、皆様に仲間入りをさせて頂きました。手術は出来ませんしどちらかというと内科系リハ医です（内科認定医、今年総合内科専門医を狙ってます）。違った視点で、リハ医療の啓蒙、診療、教育などを頑張っていければと思っています。どうぞ宜しくお願い申し上げます。



名　　前：**戸　田　　雅**

生年月日：1988年8月2日生

出身高校：宮崎県立宮崎西高等学校

出身大学：宮崎大学医学部医学科

初めまして、戸田雅と申します。はじめに昨年度は同門の諸先生方にさまざまな面でお世話になりましたことにつきましてこの場を借りてお礼申し上げます。

宮崎に生まれ、父の姿をみて育ち、この整形外科に入局をさせていただきました。自分の将来像も未だピントが合っていませんが、働いていく中で見つけていき、精進していきたいと思います。これからご指導ご鞭撻よろしくお願いいたします。

名　　前：**三　股　奈津子**

生年月日：1989年2月9日

出身高校：日向高校

出身大学：福岡大学

入局1年目の三股奈津子です。地元が宮崎なので、宮崎で働く事が出来、うれしく思ってます。一生懸命頑張ります。ご指導の程よろしくお願いいたします。